

巻頭言

# 暗闇を照らす光

立教大学チャプレン 藤田 美土里



「クリスマス」と聞くと、皆さまはどんなイメージを思い浮かべるでしょうか。

今や世界的な祝祭となったクリスマスに、華やかで賑やかな印象を持つ方も少なくないことでしょう。しかし、聖書に記された最初のクリスマスは、そうした華やかさとは対照的に、人々が寝静まった夜にひっそりと起きた出来事として記されています。

マタイによる福音書第2章では、夜空に輝く星に導かれた東方の博士たちが、幼子イエスを拝みに訪れました。またルカによる福音書第2章では、野宿していた羊飼いたちの前に主の天使が現れ、救い主の誕生を告げたとあります。救い主の誕生という驚くべき知らせを最初に受けたのは、社会の周縁に生きる羊飼いたち、そして異邦の博士たちでした。それは、神の救いの業がこの世の権力の中心からではなく、むしろ小さく弱い立場にある人々の間から始まることを示しています。この物語を聞いた人々は、暗闇の中に光が差し込んだような、喜びと希望に満たされたことでしょう。



キリスト降誕を再現したクリスマス・クラブ  
(立教学院諸聖徒礼拝堂)

このクリスマスの物語は、昔々の出来事として終わったわけではありません。それは今もなお続いています。争いの中で傷ついた人々、悲しみの中にある人々、そして私たち一人ひとりの日常の中でも、主は変わることなく暗闇を照らす光として働いておられるのです。

私は今年の4月から立教大学の非常勤チャプレンとして勤務しております、藤田美土里と申します。聖公会の信徒の家庭に生まれた、いわゆるボーン・クリスチャンですが、転勤の多い家庭で育ったため、教会に通い始めたのは小学6年生の頃でした。リベラルな父の意向だったのか、この頃まで自分がクリスチャンだという自覚無く過ごしました。

ミッションスクールに通い始めた私は、毎朝の礼拝を通して少しずつイエスさまのことを知るようになりました。当時、祈祷書は文語体で書かれており、教会での歌ミサはまるで意味不明の呪文のように感じたものです。けれども、意味もわからないまま覚えた祈りの言葉が、後になって心に深く響くようになったことを思うと、そこにも意味があったのでしょう。今でも親友の幼なじみとの出会いなど、楽しい経験もたくさんありましたが、同時に「いつか教会から解放されたい」と思っていた頃でもありました。

そんな私が今、聖職者として働いていることを、自分でも不思議に感じるがあります。そこには、思いがけない人生の転機がありました。

誰の人生にも予想もしない出来事が起こるものですが、私にとってそれは、10年以上

